

# ユースフォーラム 青年力で 開く 日本の未来 現代の貧困からみえる 地域社会の在り方

各界で活躍する識者や青年リーダーと創価学会青年部が語り合うユースフォーラム。今回は、世界の貧困をみつめてきた作家の石井光太氏を講師に迎え、貧困からみえる地域コミュニティの在り方について参加者とともに語り合った。



石井光太さん

【講師】  
**石井光太**  
「ノンフィクション作家」

【出席者】

**橋元太郎** 「創価学会青年部長」

**浅井伸行** 「同青年平和会議議長」

**山口雅明** 「同青年平和会議事務局長」

**星田剛秀** 「同第二総東京少年部長」

**佐藤光代** 「同女子青年教育者全国委員長」

**柴谷直美** 「大学生(四年生)」ほか



柴谷直美さん



佐藤光代さん



星田剛秀さん



山口雅明さん



浅井伸行さん



橋元太郎さん

## 貧困を支えたかつての コミュニティ

**橋元太郎** 本日は、ノンフィクション作家として海外や日本の貧困に向き合ってきた石井光太さんをお招きして、「現代の貧困からみえる地域社会の在り方」をテーマに、皆さんとともに学び合っていきたいと思います。

世界では、一日一・二五ドル以下で暮らす「絶対的貧困」状態の人がおよそ一二億人いるといわれています。日本では絶対的貧困状態の人は少ないものの、標準的な収入の半分以下で暮らす「相対的貧困」状態の人は、実に約二〇〇〇万人いるといわれ、その割合は六人に一人にまで及んでいます。

相対的貧困の問題は、社会からの孤立や、教育格差の拡大、貧困の固定化、さらには貧困の連鎖といった複合的な問題を引き起こしています。こうした社会問題を前に、その解決の糸口として、地域社会やコミュニティの在り方が模索されています。

本日は、現代の地域社会やコミュニティの在り方について、石井さんからレクチャーを受けるとともに、創価学会教育本部のメンバーも参加していますので、教育現場からみえる子ども達の貧困の観点も踏まえて、私たち創価学会が果たす地域コミュニティの役割についても有意義に語り合っていきたいと思います。

**石井光太** 日本の貧困におけるコミュニティを考えた場合、大きく戦前の貧困時代におけるコミュニティと高度経済成長以降のコミュニティとにわけられ、それがまったくちがうことがわかります。まず戦後の貧しい時代のそれから見えていきます。当時の日本には「朝鮮人部落」といった地域的なコミュニティから、「上野駅の地下道に暮らす浮浪児たち」のコミュニティなどがありました。

いずれも、日本社会の中に漂っていた、ある種の全体主義的な価値観から排除されたり、生活に必要な経済活動からこぼれ落ちてしまった人たちが集まって形成され

たコミュニティです。今で言えば、浮浪児のそれはホームレスのグループに近いものがあります。これらのコミュニティには、国の社会保障制度が未整備なために、そこに頼ることができずに苦しむ人たちが、生きるために一つの場所に集まった、という共通点があります。つまり、生きるために形成されたコミュニティなのです。

このコミュニティの目的は助け合いです。誰かが仕事でたくさん稼げば、そのお金を皆に分配したり、食料などの物資を分かち合うなど、人とのつながりやお互いの助け合いの中で、貧困を乗り越えようとする姿がありました。

この助け合いは、一度その中に入ると、自分だけがそこから抜け出すことは難しくなるといった負の側面があったとはいえ、それでも何の保障も得られない人たちが生きていくためには必要な在り方だったのだと思います。

このように、かつてのコミュニティは、困窮者を支える一つのセーフティネットの役割を担ってお

り、コミュニティに「助け合い」が存在していました。ここに、現在におけるコミュニティの存在意義のヒントを見いだすことができるかと思えます。

## コミュニティの 力をもう一度復元

**星田剛秀** 私には、最近SNS上で知り合った友人がいます。彼は児童養護施設で育ち、誰一人頼れる人がいない中、仕事を解雇されて経済的にも精神的にも苦しんだ末、路上生活を余儀なくされてしまいました。

かつてのコミュニティの中には、助け合いがあったということですが、今の社会の中では、人とのつながりを持って孤立してしまっている若者が増えているように感じます。

**石井** それが発展後に日本が抱えた問題です。国が成熟していく過程で、日本は貧困のコミュニティを解体し、年金や生活保護、障がい者手当などの社会保障制度によ

つて困窮者を守る仕組みへと変化しました。が、コミュニティが分断されると、そこにあったつながりまで消えてしまい、孤立化が生じます。

七〇年代前後は校内暴力や家庭内暴力、九〇年代以降は児童虐待やネグレクトや老人の孤独死などが社会問題化しました。二〇〇〇年代以降はネットカフェ難民などこれらの問題は、かつても存在していましたが、コミュニティ内のつながりによって問題は緩和されていきました。ところがそのつながりが失われつつある今は、自分で解決する道しか残されておらず、そこに限界が生まれた時点で、上記のような問題が起きるようになってしまふのです。

このようなつながりの喪失を見つめなおすきっかけとなったのが、二〇一一年の東日本大震災です。震災によって、すべてがリセットされ、アイデンティティを失った人たちは、仮設住宅という新たなコミュニティの中で暮らすことになりました。私たちは、新たなコ

ミュニティの中に生まれた人と人とのつながりを目の当たりにして、分断された社会の中で生きていくことがどれだけ困難なことであるかを強制的に実感させられることになったのです。

そして震災以降、コミュニティの力をもう一度復元しようという流れが生まれました。ただ、その流れはまだ始まったばかりです。生きづらくなつた社会を生きやすくするために、どのようなコミュニティの在り方が最適なのかという問いへの答えはまだ出てきてはいません。現在、医療、教育、経済などさまざまな分野の専門家がそのことを模索しているところですが、大事なことは、すぐに答えを出すのではなく、その模索を積み重ね続けていくことだと思います。

その意味では、創価学会青年部の若い世代の皆さんに期待したいことは、貧困に関する過去の歴史や今の貧困社会についてしっかりと学ぶとともに、自分が生活するフィールドからの目線で、コミュニ

ニティの在り方を模索していつてほしいと思います。

## 共感力が コミュニティの原点

**浅井伸行** 苦しんでいる人を支えるセーフティネットの役割を担ったコミュニティが分断されてしまった昨今、宗教的コミュニティが果たす役割にはどのようなものがあるでしょうか。

**石井** 貧困によって形成されたコミュニティに共通していたのは、そこに共感があったことです。

私は被災地の取材を通して、人間は絶望だけでは生きていけない」ということを感じました。だからこそ、人間は苦しみの中で、どうにかして希望の光を見いだそうとするのだと思います。

コミュニティの良さは、そのような苦しんでいる人たちが抱く、祈りにも似た心情に対して、共感し、肯定することができるといふ点です。

宗教的コミュニティは、まさに

それができる場所だと思います。その意味で「教義によるつながり」だけではなく「共感によるつながり」が生まれる仕組みが、宗教的コミュニティに求められる要素といえるのではないのでしょうか。

## 差異を前提にした 付き合い

**山口雅明** 私の父は貧しきゆえに高校にも行けませんでした。私自身は奨学金によって高校・大学に行くことができたが、そのような環境だったためか、貧困下における子どもの教育に以前から強い関心がありました。

昨今、教育現場においても貧富の格差拡大のため、子どもが二極化しています。その中で、子どもたちと接する教員の役割は非常に重要であると感じています。創価学会教育本部のメンバーもさまざまな状況の子どもと懸命に関わりを持ちながら日々奮闘しているところですが、貧困の連鎖を断ち切っていくためには、教員への支援

態勢についても考えていく必要があると思います。

**佐藤光代** 私は区立保育園の保育士をしています。園に通う子の中には、シングルマザーの家庭など、いろいろな家庭環境の子がいます。その中では、ちょっとした生活習慣ができない子が出てくることもあります。

創価学会教育本部では、「排から排へ」という視点で、分断につながる排除ではなく、子どもたち一人一人を大事にしていく姿勢を大切にしています。私も園で、何かができない子どもがいた場合、その子を中心に、みんなで協力する雰囲気づくりを心がけています。

子どもたちとの関わりを通して、私自身が差別のない心で関わっていくことの大切さを学ばせてもらっています。

**柴谷直美** 私は大学の卒業論文で、移民や在留民の教育課題について勉強しています。

コミュニティの観点でみると、移民の人たちというのは、コミュニ



ニティを転々としているわけですが、海外から来た人にとって、日本は言語の違いによるコミュニケーションの壁があるだけでなく、日本の社会そのものが多様な価値観を受け入れることに慣れていないために、そこに戸惑いを抱く人も多いようです。

**石井** 教育や移民の話で、一つ共通していることは、日本の社会は、「均一であるべきだ」と思い過ぎる風潮が強いことです。

たとえば、クラスに一人だけ、皆と同じようにできない子がいるとします。でもそれは、本当は当然の世界であつて、自分とは価値

観の違う人と相対するということ、世の中ではごく当たり前のようにあることです。ですが、教育の世界や移民の話においては、その当たり前が見失われてしまっているような気がします。

社会で求められる資質がコミュニケーション能力であるならば、わかりあえる人間同士ばかりの付き合いではなく、差異を前提にした付き合いができるかどうかが大切です。そして、差異があることが当たり前なんだということが社会の中で共有していくことが必要だと思えます。

**橋元** 本日は、戦後の日本における貧困の歴史を通して、コミュニティの在り方について学ばせていただきました。創価学会にも、かつて貧乏人と病人の集まりと揶揄された時代がありました。私たち創価学会青年部は、その歴史を小説『人間革命』『新・人間革命』を通して学ぶと同時に、その歴史は、どこまでも民衆に基盤を持つ団体であることの証しとして誇りに思っています。

創価学会の歴史を振り返れば、昭和三〇年代前半には、福岡の博多港近くのいわゆる「ドカン(土管)地域違法建築の林立や凶悪犯罪の横行で貧民街化した地域」で創価学会が急速に発展し、人々に大きな希望を与えていった例もありません。また、戦後の集団就職などで多くの人が都会に集まってくる中、孤立を感じる青年たちに居場所となるコミュニティを提供した歴史もあります。

日蓮大聖人の言葉に「蔵の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」という言葉があるとおりに、まさにこれからの日本にとって必要なことは、生きがいや喜びといった「心の財」を第一とする社会をつくっていくことであると思えます。そして、そこに向けて宗教的コミュニティが果たすべき役割は非常に大きなものがあります。私たち創価学会青年部は、そのことを胸に刻みながら、これからもコミュニティの力の発揮に向けて貢献していきたいと思えます。